事前の授業で、生徒同士の相互理解を図った事例

特別支援学校（肢体不自由）の生徒が居住地の中学校で合唱コンクールに参加した交流及び共同学習

〇概要

Ａ生徒は、Ｂ特別支援学校（肢体不自由）に在籍する、肢体不自由と知的障害を併せ有する中学部２年生である。本事例は、Ａ生徒が、地域のＣ中学校で居住地校交流を行った取組の事例である。Ａ生徒は、歩行が不安定であるが身辺処理はほぼ自立している。難聴があり、話し掛けられて聞き返すことがあるが、質問には適切に答えることができる。Ａ生徒と保護者から「できるだけ多くの時間を、Ｃ中学校で過ごしたい。」という申出があり、Ｂ特別支援学校担任、合理的配慮協力員及びＣ中学校担任で協議し、合唱コンクールへの参加を目標に、学習内容や日程等を検討した。

実際に居住地校交流を実施し、Ａ生徒は、合唱コンクールにおいて、交流先の学級の生徒と一緒に歌うことができた。また、歌うことを通して交流先の学級の生徒との一体感や舞台に立つ緊張感、また歌った後の達成感を味わうことができた。さらに、居住地校交流を実施することで、Ａ生徒は、Ｃ中学校の生徒との友情を深めることができた。

１．対象生徒について

Ａ生徒：Ｂ特別支援学校中学部２年生（肢体不自由・知的障害）

２．活動のねらい

Ａ生徒と保護者から「できるだけ多くの時間をＣ中学校で過ごし、Ｃ中学校の生徒と一体感を味わいたい。」という申出があり、Ｂ特別支援学校の担任、合理的配慮協力員、Ｃ中学校の交流学級担任で話合いをした。体力面に無理がなく、Ａ生徒の知的障害の状態に合わせて学習内容を変更できることが確認でき、居住地校交流の２回とも、終日をＣ中学校で過ごすこととした。また、Ｃ中学校の前年度の交流先の学級担任にも意見を求め、昨年度は見学のみだったＣ中学校の合唱コンクールに実際に参加することで、Ａ生徒とＣ中学校の生徒とが一体感を味わえるように計画を立てた。

３．事前の取組と配慮

Ｂ特別支援学校は居住地校交流を始めるに当たり、本人や保護者の支援ニーズ等を把握し、その内容を参考に、Ｂ特別支援学校から交流相手校に必要な情報を提供するような支援体制の構築がなされている。居住地校交流についての理解・啓発のためのリーフレット（「保護者用」と「居住地校交流相手校用」）やビデオを作成し、Ｂ特別

支援学校の保護者及び関係者や、Ｄ市内の小・中学校及び居住地校交流相手校の関係者に配布している。また、Ｂ特別支援学校の玄関に「居住地校交流コーナー」を設け、各交流のまとめを掲示し、保護者や来校者に、居住地校交流の取組を発信している。

居住地校交流を実施するに当たり、交流相手先のＣ中学校の２年生全体に向けて、Ｂ特別支援学校のＡ生徒の担任が約１時間の事前授業を行った。その際に、Ａ生徒の障害特性やＡ生徒とコミュニケーションを円滑にする方法、居住地校交流の意義、特別支援学校での教育やユニバーサルデザイン等についての説明をした。その説明には、Ｃ中学校の生徒だけでなく、Ｃ中学校２学年担当の多くの教員も参加した。その結果、居住地校交流の当日はＡ生徒が安心して学習に取り組むことができた。

Ａ生徒は歩行が不安定なため、Ｃ中学校での階段移動の際には、必ず近くでＢ特別支援学校の担任が見守り、必要に応じて上体を支えるなどの援助を行い、Ａ生徒が居住地校で安心して活動できるようにした。また、Ａ生徒の聞こえにくさに対応するため、Ｃ中学校の教員や生徒に、Ａ生徒には大きな声ではっきりと話すよう伝えた。加えて、教員が授業で全体へ指示を伝えた後には、必ずＡ生徒に個別に指示を繰り返して伝えたり、指示したことをＡ生徒が理解しているかの確認をしたりするように依頼した。

Ａ生徒の階段昇降時における介助者の体の支え方について、Ｃ中学校の階段の構造や配置を確認した上で、Ｂ特別支援学校の担任と自立活動担当の教員で検討する機会を設けた。その後、Ｃ中学校の交流学級担任と、介助する手を添える肘や腰の具体的な位置について共通理解を図る機会を設けた。

Ｂ特別支援学校の生徒は私服で通学しているが、Ｃ中学校は制服を着用して通学している。そのため、居住地校交流のときにはＡ生徒も制服を着用して通学した。このことは、Ａ生徒にＣ中学校の一員であるという意識をもたせると同時に、Ａ生徒の疎外感を取り除き、安心して活動に取り組むことをねらった。Ａ生徒も制服を着用することで、活動に自信をもって臨むことができた。また、合唱コンクールに向けて、Ａ生徒が本番に自信をもって臨み、合唱を通してＣ中学校の生徒と共に取り組む一体感や達成感を味わうことができるように、Ｂ特別支援学校の授業においても、居住地交流の授業に臨むための事前学習を行った。その結果、合唱コンクールの本番では、Ｃ中学校のクラスメイトと共に自信をもって堂々と歌うことができた。

４．活動の様子と成果

交流及び共同学習で学習する各教科では、知的障害のあるＡ生徒が授業に見通しをもてるように、題材を１単位時間で完結するように内容の変更を行った。また、授業の中で、グループやペアで考えたり活動したりする場面を多く設定することで、Ｃ中学校の生徒が、Ａ生徒に分かりやすい言葉で教員の説明を補足したり、聞き取れなかった内容を再度伝えたりし、Ａ生徒が授業内容を理解できるようにした。このような取組の結果、生徒同士のコミュニケーションが活性化し、授業中はほとんど教員の支援を受けずに授業に参加し、生き生きと活動することができた。座席は、Ａ生徒の移動のしやすさや教員からの支援の受けやすさ、Ａ生徒の聴力や視力、集中力を考慮し、１列目の廊下側に配置した。その結果、教科担当の教員との距離が近く、Ａ生徒が自分から分からないことを質問することもできた。さらに、体育館の舞台の階段に手すりがなく、Ａ生徒が自力で昇降することが困難なため、合唱コンクールに参加した際には、Ａ生徒の前後に生徒２名がついて、一人が腕を支え、もう一人がバランスを崩したときに対応できるようにした。Ａ生徒は、事前に時間を取り、前後の生徒と舞台の階段昇降の練習を行うことで、合唱コンクールの当日は、安心してスムーズに舞台に移動することができた。Ｃ中学校の合唱コンクールに参加することで、他学年の生徒や保護者にもＡ生徒の存在や居住地校交流について知ってもらう良い機会となった。

中学校は教科担任制のため、学級担任と密な打合せを行っていても、教科の授業ではそれが生かされないことが多い。しかし、今回の居住地校交流では、事前にＡ生徒の担任によるＡ生徒への関わり方等の説明を交流先のＣ中学校で行い、その説明を生徒だけでなく、学年の教員も一緒に聞いたことや、ほとんどの教員が昨年度の居住地校交流にも関わっていたことから、Ａ生徒の障害特性や実態についての理解が深まった。そのため、各授業において、Ａ生徒に適切な合理的配慮を提供することができた。また、Ｃ中学校で初めて経験する学習内容についても、Ａ生徒は生き生きと活動し、授業内容を理解することができた。特に、多くの授業で取り入れられたグループでの学習は、Ａ生徒の理解を助けるだけでなく、Ａ生徒を支援する生徒にとっても障害のある友達を理解する学習となり、生徒同士の自然な関わりや一体感が増すという点でとても効果的であった。さらに、本事例において、教員は、Ａ生徒のコミュニケーション能力を高めるために、できるだけ遠くから見守るという支援を行った。１回目の居住地校交流では、自分から話し掛けることの少なかったＡ生徒だが、２回目には、自分からＣ中学校の生徒に話し掛け、手伝ってくれた生徒にお礼を言うなどの成長が見られた。休み時間も気の合う友達と図書館へ連れ立ち、自然な雰囲気の中で充実した時間を過ごすことができた。

Ａ生徒にとって今回の居住地交流において、最も貴重な学びとなった体験として、合唱コンクールへの参加がある。Ａ生徒は、合唱コンクールにおいて、交流先の学級

の生徒と一緒に歌うことができた。歌うことを通して、交流先の学級の生徒との一体感や舞台に立つ緊張感、また歌った後の達成感を味わうことができた。居住地校交流を実施することで、Ａ生徒は、Ｃ中学校の生徒との友情を深めることができた。

５．事後の取組、今後の課題

今回の居住地校交流は、Ａ生徒にとって、コミュニケーション面をはじめ、様々な成長がみられる充実した居住地校交流であった。しかし、Ａ生徒のＣ中学校での様子を見て、更なるＡ生徒の学びの充実を考えると、居住地校交流の回数を増やす必要があると考える。そのために、遠隔授業システムなどのＩＣＴ機器を活用し、合唱の練習を一緒に行う方法なども考える必要がある。今後、更なる基礎的環境整備を進めていくことが課題である。